

"ひとりだけの情シス"を支える 簡単&手間なしBCP対策

ステップ1つでクラウドへバックアップデータを自動複製



ユーザープロフィール

業種: 卸売・小売業
会社名: 株式会社お世話や

OSEWAYA



課題

約20年前のサーバ導入を機にバックアップ運用を開始。当時のバックアップソフトウェアは英語版が主流のなか、すべて日本語化されている Arcserve Backup に出会い導入。会社の成長とともにシステム投資も増加し、運用管理負荷も増加し続けていたこともあり、最新の Arcserve UDP に変更、運用管理負荷軽減に貢献したが、システムの拡大・複雑化に伴うライセンス管理の煩雑化に課題を抱えていた。同時に、東日本大震災をきっかけに、災害対策も本格的に検討する必要があり、超多忙な"ひとりだけの情シス"は、最適解を求める日々を送っていた。

経緯

そこで発表されたばかりのバックアップ専用アプライアンス Arcserve UDP Applianceに着目した。これなら複雑で煩雑な操作や設定が不要で、バックアップ運用のみに集中できる。障害時には、解決策をArcserveのサポートに確認できる。Arcserve UDPの機能や使い勝手に満足していた担当者は、“やっとめぐりあえたソリューション”と惚れこみ、取り扱いに慎重なサポートベンダーを逆説得して導入。大幅に管理負荷の軽減を実現する。

導入

バックアップ専用アプライアンスの導入で、運用管理効率化の目途がついたが、本社被災を想定したBCP対策の実現という課題が残っていた。そこで同社が選んだのは、これまでの運用の延長線で実現できる Arcserve UDP Cloud Hybridだった。事前に構築作業が必要なパブリッククラウドと違い、すでに導入したバックアップ専用アプライアンスの管理コンソールで Arcserve UDP Cloud Hybrid ヘリプレリケートするための情報を追加するだけで自動的にクラウドへデータを転送できる。特別な導入作業が不要のシンプルさが多忙な情シス担当者に理想的だった。

効果

“本当にクラウドへ転送できているのか”と疑うほど Arcserve UDP Cloud Hybrid の設定は容易だった。バックアップ運用とリストア対応を社内で完結でき、その上本格的なBCP対策も実現した。これにより事業継続はより盤石なものとなった。多忙な"ひとりだけの情シス"だからこそ Arcserve UDP Applianceと Arcserve UDP Cloud Hybridの組み合わせがベストという直感は間違っていなかった、とシステム担当者は日々確信している。





“ひとりだけの情シス”を悩ませる保守運用、ライセンス管理の複雑化

株式会社お世話やは、日本有数のアクセサリー＆ファッショングッズ卸事業者だ。また原宿を始めとした全国の「OSEWAYA」ショップで自ら店舗販売するとともに、オンラインショップも運営している。

代表取締役 牛場 清氏は、アクセサリーは生鮮食品と同じ、と語る。「モットーは『旬のものを新鮮なうちに』。常にアンテナを張って変化をとらえ、山が生まれそうな“兆し”が見えたら、すばやくアクションを起こし、しっかり市場が大きくなる準備を整えてできるかぎりピークの期間を享受することが何よりも重要です」

同社のバックアップソフトウェアの導入は約20年前に遡る。「最初の製品は使いにくかった」と、株式会社お世話や 情報システム部 黒崎真美氏は語る。同氏は新卒で経理部に配属されERP導入に関わったのを機に、システムの世界に触れるようになった。経験ゼロから独学でサーバリテラシーを身につけ、以来一貫して同社の情報システム構築を先導している。情報システム部専任となった今は、いわゆる“ひとりだけの情シス”であり、同社のシステム企画・運用を一手に担うとともに、約200名のスタッフから寄せられるPCやシステムに関する問い合わせに日々追われている。そんな黒崎氏はArcserve製品導入のきっかけを次のように語る。

「当時のバックアップソフトウェアはほとんど英語で、2製品ほど使いましたがとてもわかりにくかったです。運用に苦慮する中で見つけたのがArcserve Backupでした。管理画面が日本語化されていたうえ、日本語サポートも提供されていて、唯一すべてが日本語ができるソフトウェアでした」

2011年、同社は東日本大震災を機にデータ保護での入れを決断した。黒崎氏は時間を見つけて被災企業の話を調べ、事業継続のためにはデータ資産を守る重要性を再認識する。また、この頃から同社では仮想化基盤の導入が加速していた。日常運用を複雑化させることなく、仮想マシン単位のバックアップを確実にコントロールする方法を模索する中で、着目したのがArcserve Unified Data Protection(以下、Arcserve UDP)だった。これなら、システム全体を丸ごととて丸ごと元に戻すこともできれば、ファイル単位のリストアも簡単に実現できる。特に、後者は同社にとって重要だった。エンドユーザーが過失でファイル削除してしまうケースがよくあるからだ。機能や使い勝手には満足していたものの、システム化が進むことでサーバが増加していく、各システムごとにそれぞれの保守期間やライセンスの管理が複雑になってしまいなど、日々業務に追われる黒崎氏にとっては管理負荷が高かった。



株式会社お世話や
代表取締役 牛場 清 氏

“やっとめぐりあえた”と実感したArcserve UDP Appliance

サーバのリプレイスの際にイニシャルコストを下げるのことと、日常の運用工数を下げる考えていた時に出会ったのが発表直後のArcserve UDP Applianceだった。自らWebでArcserveが開催していたArcserve UDP Appliance紹介セミナーに参加し、ただちに切り換えを検討した。

「これこそ私がやっとめぐりあえたと実感したバックアップソリューションです。ソフトウェアだとハードウェアの選定、OSを含む設計や構築などを考える必要があり、サポートベンダーにインストールをお願いしたり、障害の一次切り分けをこちらで行わなければなりません。しかし、アプライアンスであれば、バックアップサーバーのことは一切考える必要がなく、何かあってもArcserveのサポートに問い合わせればいいのが魅力でした。サポートベンダーは『アプライアンスは新製品で実績がない』と慎重なスタンスでしたが、『中身はArcserve UDPなんだから大丈夫。ダメなら直接Arcserveに連絡を取る』と、こちらが逆説得するような形で導入を決めました」



Arcserve UDP Applianceを採用して同社のバックアップ運用は大きく変わった。典型的なのがファイル単位のリストアだ。バックアップのデータベースに対してリストアするための設定手順が多く、急を要するのに手間がかかっていました。特にテープを利用していた時はエンドユーザーにリストアデータを提供するのも1~2日かかっていたんです。しかし、今は私がArcserve UDPのエクスプローラーとの連携機能を使って、エクスプローラーからバックアップデータの確認が簡単にできます。ビューを切り替えて元データとバックアップデータ比較を行い、該当するファイルをドラッグ&ペーストするだけで戻せます。ですから『消しちゃった』と言われても『今戻すからちょっと待って』と言って、すぐ対応できるようになりました」(黒崎氏)

最大2日かかっていたバックアップデータからのリストアが5~10分に短縮されたわけで、この違いはやはり大きいといえるだろう。

バックアップ先を追加するだけで簡単に実現するBCP対策

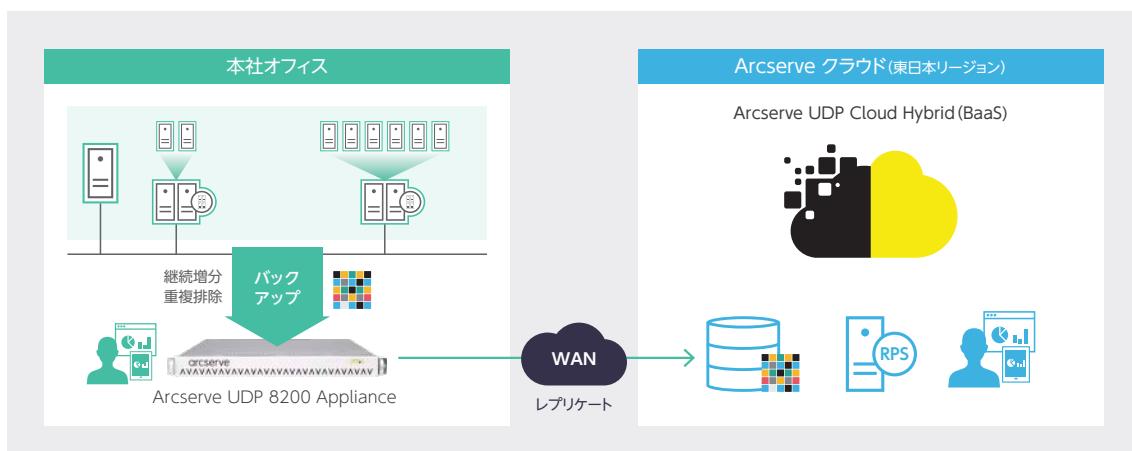
現在、同社では物理サーバ7台に約40の仮想サーバを構築し、オンプレミス環境でシステム運用を行っている。サーバルームは東京都渋谷区の本社に置かれており、地面より低いいわゆる“半地下”にある。周辺の土地は比較的低く、浸水のリスクがないとはいえない環境だ。2019年に発生した台風19号では多摩川が氾濫し、お隣の世田谷区でも浸水被害が発生している。豪雨・台風など自然災害が凶悪化している今日、浸水被害は他人ごととは言えない状況であり、さらなる備えを考える時期に来ていた。黒崎氏自身それを自覚していたが、Arcserveの営業担当者と話すようになったことも災害対策を決断する一助となったようだ。

「システムがダウンして何が困るかというと、人事・給与データがないために給料が払えない、受注書・請求書データがないために支払いが受けられることだと聞きました。それで会社が回らなくなると。また当社には、社長が非常に重視している日報システムもあります。社員が毎日の仕事の中で得た“気づき”を記して報告するというもので、迅速に次のアクションを起こすための情報資産です。

災害に遭うことは他人事ではありません。この社屋が壊滅的な状況に陥ったとしても、会社が存続するために最低限必要なデータはクラウドにも置いておくべきだと考えました」

それでは、どのように実現するか。黒崎氏が選択した災対先はArcserve UDP Cloud Hybridだった。
「パブリッククラウドも考えましたが、この場合はサーバの構築やソフトウェアの導入などいろいろ設定しなければなりません。しかし、Arcserve UDP Cloud HybridならArcserve UDPと同じ管理画面でレプリケート先を一つ追加するだけ。それだけでクラウド上にバックアップをしてくれるので、他の業務にも追われている多忙な私には、このシンプルさが最適でした」

多忙な“ひとりだけの情シス”でも簡単にBCP対策を実現できる





2020年夏、まず1TB容量でスタート。ほどなく2TB追加した。ボリュームを占めているのは、カタログや通販ページ作成用のサイズの大きい画像データや日報システムのデータベースデータだ。もちろん、人事・給与や経理・会計といった基幹システム上の生データなども含まれている。

“ひとりだけの情シス”にベストマッチなArcserve UDP Appliance&Cloud Hybridの組み合わせ

「Arcserve UDP Cloud Hybridは、Arcserve UDP Applianceの管理画面からレプリケート先を一つ追加するだけなので“これで本当に転送できているのか”と不安になりましたが、実際にはクラウド転送できていました」

黒崎氏は利用の感想をこう語る。

今回の対策によって、Arcserve UDP Applianceで日次バックアップを取り7世代分のデータ管理を行うとともに、Arcserve UDP Cloud Hybridにも毎日日次バックアップをクラウドへ送るというバックアップ運用が可能になり、冗長性の高いBCP対策が実現した。

「大規模な自然災害が起きたら、本社でシステム復旧できる絶対の保証はありません。たぶんそのときいる場所で、できることをしようということになると思いますが、クラウドに生きたデータさえあれば別の端末でそこへアクセスできますし、私がアクセスできなくても誰かに助けてもらえます。少なくとも社員みんなで絶望に沈む必要はありません。Arcserve UDP Cloud Hybridの導入で、非常事態に遭遇しても会社が存続できる対策が打てた、会社にとって大きな前進になったと感じています」

BCP対策だけではない。サポートベンダーに極力頼らない自社完結のバックアップ運用とリストア対応という果実もすでに得ている。

なぜArcserveソリューションを選択し続けるのかという問いに、黒崎氏はその理由の一つとして、Arcserveが早くから実施していたハンズオンセミナーの存在を挙げた。まだ、そのような取り組みを展開していた同業ベンダーはいなかった。ここで新しいバージョンが出るごとに参加し、さまざまなアップデート機能を実機でじっくり試せることが、日頃は多忙でなかなか外へ出られない黒崎にとって最も効率のよい学習機会になっていた。ここでナレッジを蓄積するとともに、Arcserveへの信頼が高まっていたという。もう一つは、Arcserve担当者との出会いだ。“ひとりだけの情シス”的に、直接メーカーから確かな話を聞けることは非常に大きなサポートになるという。

「情報システム部というのは、ほかの部門からは何をしているのかまったくわからないようです。社内に助けを求められない分、外部に十分な援軍を確保することは非常に重要です。Arcserveはまさにその一助を担ってくれていて、非常に頼もしく思っています」

約200名のスタッフが利用する情報システムの安定稼働をその双肩に担っている黒崎氏。“ひとりだけの情シス”だからこそArcserve UDP Appliance& Arcserve UDP Cloud Hybridがベスト、と直感したことは間違つていなかつたと同氏は日々確信している。

arcserve®

すべての製品名、サービス名、会社名およびロゴは、各社の商標、または登録商標です。
製品の仕様・性能は予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。
Copyright ©2021 Arcserve (USA), LLC. All right reserved.

Arcserve Japan

お問い合わせ

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング
Arcserve ジャパン ダイレクト 0120-410-116 (平日 9:00~17:30)
JapanDirect@arcserve.com

WEBサイト:www.arcserve.com/jp
※記載事項は変更になる場合がございます。2021年1月